美術の窓(49)

特別展「松花堂昭乗」を終えて

大和文華館館長　吉川逸治

昭和の初めごろ、東京帝国大学の文学部で瀧精一教授のもとに美術史の講義を聞き、作品の観賞や評価の上での教育や指導を受けた私は、先生が特に茶道の立場からの観賞上の影響について言及され、これに煩わされることなきよう注意すべきことを強調された点がその後も引き続いて心に残っていました。先生は松花堂昭乗らの提唱する書画の教養や鑑賞に対しても否定的な態度をとられ、永年先生が指導された美術誌「国華」誌上では、松花堂昭乗に関する記事や図版は極めて少なく、わずか二、三例を数えるにすぎません。新しい学問として、美学、美術史学を講ずる先生は、文学部の哲学系学問の一つとしてむしろ西洋流の方法論で美術史講義を坦々として進められました。一方、茶道の教養について、触れられることは少なく、日本や中国の美術観照に茶道趣味はむしろさまたげになると講義余談にもらされる程度でした。

わずかに卒業後、先輩の森蘊さんや梅津次郎さんなど、亡くなられた諸先輩に小堀遠州や石川丈山の話を聞かされ、京都洛外に彼らの足跡をたずね歩いたことがありましたが、松花堂の名前は記憶に残りませんでした。それがこの度、大和文華館の特別展の計画に選ばれ、学芸員中部義隆君の努力によって、この気むずかしい八幡宮の学僧の美術遍歴の全貌を浮かび出せることができたと思います。

大阪夏の陣は徳川勢の圧倒的な勝利に終わって、戦乱時代の残影も払拭され、平和な江戸時代が始まるとされます。しかし、実際はまだまだ豊臣家の余栄は人々の心底に残り、また、さらに遡って、厳しい禁令にもかかわらず、先代以来の切支丹宗門の内外から働きかける執念の持続は消えていませんでした。少し思慮深く考える教養深い貴紳には、日本の運命は依然として、さまざまな性質の危機がはらんでいて、決して心から和平の生活を楽しんだ情勢ではなかったと思います。

かつて壮年の秀吉は、この不安に敏感だったのではないでしょうか。利休も堺の人として、世相に明るく、敏感だったでしょう。秀吉は、この他人の敏感さに己をおびやかすものがあると見たのでしょう。歴史はその後大小の事変とともに流れ、彼らの孫の代となって、ようやく人々の普通の生活のうちにも礼儀、作法の整いを求める平静の年々を迎えます。しかし、古代以来の神仏のさまざまの礼拝、祈念の儀式、習慣、数々の宗教儀礼は数世紀におよぶ時世の変遷のうちに古びて、弱体となっていました。激化する新時代の公私の生活に迎えられるためには、現実の生活、風俗からいろいろと新しい生活儀礼を作りだす工夫も凝らさねばならなかったと思います。

こういう事情の下に、利休の孫の宗担は茶の湯の法式を整え、茶室の作りから、作庭、道具一式まで規整し、しかも、そこには当時の社会の現実生活の反映まで受容しています。茶の湯の儀礼のなかには切支丹の礼拝儀式の一端さえ秘かな参入がうかがわれるらしいということです。そして、茶の湯の法式は絵画、工芸から建築、作庭の芸術にも、大切な影響を及ぼすことになりますが、質素な外観のうちに都雅の洗練を競い、知的誇りを隠しません。松花堂が活躍し、自己の美意識を醸成していた時代背景は、おおよそこのようなものではなかったかと想像されます。真言密教の修行を成就し、書法の能筆として知られた松花堂が、時の幕府方の有力な官僚人をも含めて、時の在野の知識人たちに少なからざる影響力を発揮したことは非常なものであったと想像されます。宗達と同時期に活躍していた松花堂は、宗達とはかなり異なる芸術性を有していましたが、彼もまた光琳、抱一への道をひらく準備をした画人の一人と言えます。

千利休像　伝長谷川等伯筆
古溪宗陳賛　正木美術館蔵

季刊 美のたより No.105
平成5年11月12日
発行　大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.